

# 高坂彫刻

## プロムナード

Takasaka Sculpture Promenade

### ～高田博厚彫刻群～

高坂駅西口から約1kmにわたって、常設展示されている32体にも及ぶ彫刻群。  
この彫刻群は全て、一人の彫刻家による作品です。

君は指で  
思索する



高田 博厚(1900～1987)

日本を代表する彫刻家・文筆家。少年時代から文学・芸術に目ざめ、18歳で上京し高村光太郎と出会い、彫刻の道に入る。31歳で渡仏しヨーロッパの優れた知識人と交流しながら、第二次世界大戦を潜り抜けて活動し、57歳で帰国。その後精力的に創作活動をし、87歳でその生涯を閉じた。来年没後30周年を迎える。



32体の

## 彫刻作品

写真と対になっている文章は、彫刻作品それぞれに添えられている高田博厚の言葉を原文のまま記載しています。



高坂駅

※①遠望、②大地は一番初めに設置されたもので銘板はありませんが、①は埼玉県知事、②は東松山市長が揮毫しています。



①遠望



②大地



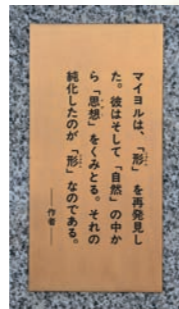
③水浴

③水浴  
ことばの「身振り」によつてではない。内面の思念が要約凝集されて、もつとも簡潔に一元化して「存在している。これが真の「形」なのだ。彫刻とはそれ以外のなにものでもない。



④アララン

※アララン  
フランスの哲学者、評論家。「幸福論」を著し、20世紀前半のフランスの思想に大きな影響を与えた。



彫刻に添えられた銘板

④アララン  
彼はモンテーニュやゲーテの直系子孫なのである。  
「哲学とはもつとも深い意味において自分を見出すことである。人間の連続を。」



⑤海

⑤海  
ある日、陽暮れに近い時刻に海岸にたたずんでいた。にわかに天地一切が薔薇色のもやに包まれてしまった。空も海も地面ももう区別がつかない。そうして一面のばら色の中に、空にも海にも地にも、ちらちらと金色に輝くものがある。もやの動きなのだろう。物音も水の中のように遠のいてしまった。風景そのものが恍惚状態にとけてしまっている。僕は茫然としていた。「自分」しかないのだ。しかもそれが何か広大無辺なものに包まれていて、実に懐かしいのだ。



⑥女のトルソ

⑥女のトルソ  
首も手もないトルソの美しさは近代の発見と言えよう。昔は「美に対する観念」というより、むしろ藝術品を求める注文主が「完全な状態」を要求した。しかし、発掘された古代作品が、首や腕がない時、より本質の「美」を示していることへの感覚的知恵を近代人に与えた。



⑧カテドラル

⑧カテドラル  
ロダンが「フランスのカテドラル」の中で、ランスの寺を「跪いて祈る女」と云っているのは、勿論君は知っている。僕がはじめてランスの寺で受けた感動は、後年ギリシアのシンシアで受けたものと同質である。春の小雨の降る日、細い道に入つて右にまがったら、不意に眼の前に、雲の流れる濡れた空の下に、膝を折り、胸を張り、合掌し天を仰いで若い女が祈っていた。ランスのカテドラルが……

# 高田博厚のエピソード

それぞれの肖像にあるエピソードの中から2つを紹介しましょう。

(高村光太郎)

高田がフランスに去ってしまっていて、彫刻のことを語り合える者は誰もいない

⑦高村光太郎  
日本の彫刻界で彼のように聡明確な腕をもった者は一人もいなかった。その上彼の世間を相手にしない孤高な魂はそれに気品を与えた。彼は木盆にヴェルレーヌの詩、「われは選ばれたる者の怖れと喜びを持つ」を原語で自ら彫りつけていた。



⑦高村光太郎

高田は、上京するとすぐに知人を介して、16歳以上も年上の高村光太郎と出会う。めったに人付き合いをしない高村夫妻であったが、高田は受け入れられた。二人は夜が更けるのも忘れて芸術や文学について語り合い、普通は人に見せることのない制作途中の彫刻を見せ合うほどの仲であった。

「先輩高村との「彫刻」についての始終の対談がなかったならば、私は絵画かあるいは文筆の方へ歩み寄っただろう。高村は弟子をとる人でも、弟子扱いする人でもなく、また意識して人を指導するようなことはしなかった。人を訪ねない、ことに有名人をあえて訪ねない性質の私も、彼だけはしげく訪ねた。「会いたくて人」これは、人間のもっとも大切な美德である。」

高村光太郎(1883~1956)  
日本を代表する彫刻家、詩人、イギリス、フランスで近代彫刻を学び、ブロンズの「手」や「光雲像」、木彫の「鯨」など優れた作品を残し、日本の近代彫刻の先駆者となる。また、人道主義的詩人として、口語自由詩を大きく前進させ、「道程」や「智慧子抄」などが高く評価されている。



⑩マハトマ・ガンジー

(高田は)単に形だけを形づくるのではなしに、形にしるしづけられている精神をも形づくる本当の芸術家です

…君は指で思索する  
(ロマン・ロラン)

⑨ロマン・ロラン(1866~1944)  
フランスの小説家、思想家。音楽家クリストフを描いた長編小説「ジャン・クリストフ」は若い世代に大きな影響を与え、1915年にノーベル文学賞を受賞。人道主義者の良心を反映した作品を残し、高田が生涯信頼・尊敬した人物。

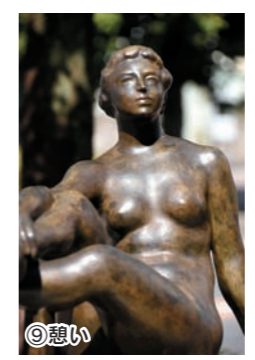
マハトマ・ガンジー(1869~1948)  
インド民族運動の指揮者、インド建国の父。非暴力による権力への抵抗を呼びかけ、世界的に注目を集め、インド独立に導いた。人類の教師、マハトマ(偉大な魂)と呼ばれた。

⑩マハトマ・ガンジー  
部屋の窓際に大きな老眼鏡をかけたやせこけた白衣の小人が達磨のように坐って、糸車を紡いでいる。こちらの壁際に私は坐る。黙礼して一言もかわさない。寂かな部屋の中にもじんじんとして伝ってくるものがある。なんにも言わないで、こんなに人間の存在を強く感じることはない。

ガンジーがロランの元に滞在した1週間、ガンジーの顔を毎日デッサンする。黙礼と対座の1週間であったが、高田の心にガンジーの存在は深く刻み込まれ、帰国後にインド救済ライセンダー設立のための依頼を受けてマハトマ・ガンジー(全身像)を制作した。

1931年渡仏した高田は知人を介して、フランスの師友に紹介され、ロマン・ロラン、マルセル・マルチネなどの知遇を受けた。ある日、パリ郊外で創作活動をしていた高田あてに旅費入りの書留がスイスのロマン・ロランから届く。「ガンジーがロンドン会議の帰途にヴィルヌーヴ(ロランの家)に来て一週間滞在するから、彼の素描デッサン(でも書く気ですぐ来い)」という内

⑨悪い  
真の「空間」とは「自然」の中に「自我」が生むものなのだ。高い藝術作品がこれを示している。



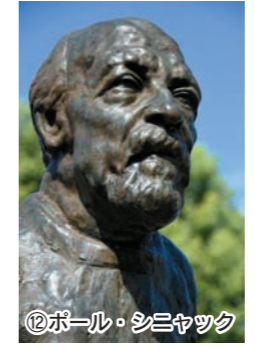
⑨悪い



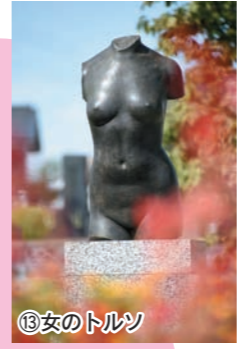
⑩女の太トルソ



⑪在No2



⑫ポール・シニャック



⑬女のトルソ



⑭タゴール

⑪在No.2  
彫刻が真の「彫刻」でありうるのは、あらゆる藝術作品に共通する一つの普遍性、形而上なものが「形」を通じて内奥からにじみ出ている「存在」であることだけである。

傑作だ。僕はうなづいた。シニャックもなっている…。  
⑬女のトルソ  
どのように完全な姿態を巧みに写しても、それは真の「形」とはならない。人体の一部を現わしても、それが極限の「調和」をえているならば、それこそ本当の「形」である。

とが一つになっっている「たのしみ」である。彼の精神風土、詩魂、思想の原形質があると、私は思うのである。タゴールの思想形体は難かしいものではないのだ。彼の本質はひじょうに単純素朴なのである。彼の絵がよくそれを示しているだろう。

※ポール・シニャック  
フランスの画家、1920世紀の新印象派の代表的な画家。

※タゴール  
インドの詩人、思想家。アジア人初のノーベル賞受賞者(文学賞)。

※棟方志功  
版画家。民話、神話を題材とする日本的表現が世界的に評価された。

※新渡戸稲造  
教育者。国際連盟事務次長として活躍。「武士道」著者。

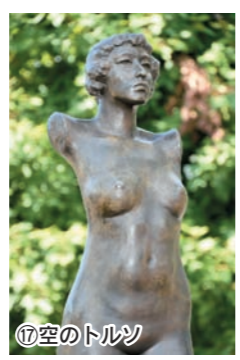
※宮沢賢治  
詩人、童話作家。信仰と農民生活に根ざした創作活動を行った。



⑮女のトルソ



⑯棟方志功



⑰空のトルソ



⑱新渡戸稲造



⑲裸婦立像



⑳宮沢賢治

⑯棟方志功  
棟方は、私が幼時の風絵を連想したように、素朴な民衆作家から出発した。当時日本では、柳宗悦が民衆作品の美しさを一般に教え、陶器の浜田庄司がこれを享け継いだ。棟方はこの空気の中で育った。私は長い間日本で、約三十年間の仕事を知らなかったが、帰ってきて彼の仕事をみて、彼がもう「版画家」を超脱した本当の美術家であるのに感動した。

⑰空のトルソ  
画家が一定の額の中に、風景や静物や人物を構成するように、彫刻家は内部のものが形を構成する知恵を学ぶ。この意味で、私にとって人体も肖像も同じことである。「形」とは内部から押し出される力の極限限界なのだ。これを捉えること、すなわち、内部の力を一元的な形体・簡潔率直な形に要約するのが彫刻であろう。彫刻とは純粋な形而上な術であり、音楽と共通する。

⑳宮沢賢治  
「私の賢治」で好い。それは素朴実直な東北人、土壌に根を張った辛抱づよい一律に凝まつた人間存在。私が打たれたのはその「単純」な徳性であり、もしそれに「詩人」とか「思想家」などという調味料を加えようとしたら、私自身が混迷してしまうだろう。…同じ東北人でありながら啄木と賢治は対蹠的な存在である。

②空  
直立像が両腕を持つ場合、その位置の決め方がいかにむずかしいか。マイヨルはそれに苦心した。彼は直立姿態に彫刻本質を感じ、一生をかけた。

②憩う  
「マイヨルは「形」を再発見した。彼はそして「自然」の中から「思想」をくみとる。その純化したのが「形」である。

②男のトルソ（ヘラクレス）  
「ベルヴェデーレ」の首も腕もない一つのトルソは「ラオコーン」の身振りが説明するよりもっと自由に「人間」を示している。ミケランジェロはそれを知り、彼の作品でそれを私達に教えてくれた。

②女のトルソ  
トルソがそれだけで完全作品になるためには、よほどの力量、というより作者の内面的充実がいる。単純に見えるから、そこに無量のものを満たすのがむずかしいのである。古代作品にはこれがあった。

②礼拝  
私がいる家のすぐ後ろの丘の上のサン・ミッシェル寺の鐘がある。夕べの祈の鐘である。この山峡の高みにあるアヌンシアータ修道院の神父が私に言ったことがある。「私は40年この山から一步も下に降りないで、毎日の潮を見ています。」

②高橋元吉  
高橋元吉は私の一生の友だった。生き方も歩き方も二人はずいぶんちがっていた。しかし、自我の内部が命令するもの、精神の秩序、この点で二人は全く一つであった。

※高橋元吉  
詩人・書家で前橋市の煥乎堂の社長、高田の生涯の友。



②在No.1  
「主よ、日は傾き夕暮が迫ってきましたから、どうか私たちと共にいてください」「ルカ伝」の中の、イエスが復活して弟子たちのところに現れ、食事を共にした折の弟子たちの言葉である。

②女のトルソ  
姿態や構造に過剰な「説明」がなく、ただ「黙って在る」ことがそれに接する者に「無限に語りかけ」てくる。これが美術

の本質だ。言いかえると首も手も足もないうた「人間の中心なる胴体」だけで「美」を示せる作家が本場の彫刻家だ。

②横たわる女  
ただ親密な中で、歩みだつてきた私達の精神の姿を語り合いたい。形に触れ得る喜び、どのような話にも、常に私達の魂が形而上のひろやかさにつながっている。ある欲びを得た。

③パラスのトルソ  
パラスはギリシア神話のアテナ女神の別名で、ホメロスの物語ではいつも「パラス・アテネ」と呼ばれている。

③水浴  
真の彫刻とは、心ある者が立ちどまってひとり見るとき、語りかけてくるものである。装飾や建築に付属していた大昔から、彫刻の本質はそうであったのである。

私にとっては、芸術創作とは「自我」が未知の自我に「行動」することである。  
：自我が「自我」に行動する」ということの証明と証拠は、「自我」が「形」を得、「形」を成すことである。  
：私が芸術に求めるのは、自分の「思想」が「形」を得ることである。  
：純粋な「形」を持った彫刻作品を作り得たならば、「自我」は「永遠に未完の、連続する存在」に要約されるであろう。が、ここに至るには、辛抱と熱情のいる長い難路をたどらなければならぬ。私はその道を幾歩歩み得たろうか？  
：自分の未熟は終わることを知らないだろう。だから、どのような環境に置かれても、仕事は続けるだろう。

「私の言葉」  
高田博厚(74歳)

## 田口弘さんが語る 彫刻通りに込めた思い

萩原朔太郎  
東松山市における高田博厚作品の33体目となる彫刻「萩原朔太郎」が今年6月、詩人で教育者の田口弘さんから寄贈されました。現在は市立図書館で常設展示しています。



※萩原朔太郎  
詩人。言語の音楽性を活かした口語自由詩を完成させた。

私が教育長をしていたときに、当時の市長（故・芝崎亨氏）から相談され、「高坂駅から1kmの路上の両側を彫刻で飾ってはどうか」と提案しました。  
以前から高坂駅に高田博厚の作品が2体設置されていたので、日本最高峰の彫刻家の作品で飾れたら、全国に誇れる彫刻通りになると考えていました。  
日本各地に路上で彫刻作品を展示しているところがありますが、一人の作家でこんなに多くの作品を展示している所は、他にないと思います。  
また、彫刻作品だけでなく、作家の芸術観にも触れてもらえるよう、高田が信頼していた美術評論家の福田真一氏に

田口 弘  
元東松山市教育長  
14年以上にわたり、教育長を務める傍ら、日本スリーデーマーチや高田博厚彫刻群の建設に携わる。在職中に市内の数多くの小中学校の校歌を手掛けるなど多くの功績を残している。



高田の著作の中から言葉を選んでもらい、銘板にして彫刻作品それぞれに添えています。  
どうぞ、作品を観るだけでなく、高田博厚の芸術観にも思いを馳せながら散策を楽しんでください。

## メンテナンスを担う 三郷工房

春と秋の2回、32体の彫刻全てのメンテナンスを行っています。父（沖村正康）から受け継いだ方法を守り、心を込めて作品と向き合っています。

東松山市を訪れるたびに彫刻が磨かれていたり、周囲に花が植えられていたり、作品が地域の人々から愛されていることが分かります。「お疲れ様です」と話しかけられたり「綺麗になるね」と学生などの話し声が聞こえたりすると、僕らの仕事で町を彩る作品が綺麗になり、通りかかる方々が喜んでくれることに、とてもやりがいを感じます。



沖村正康(1940~2012)  
彫刻家、高田博厚に師事。彫刻作品を手かける傍ら三郷工房を設立し、高田作品をはじめとして、様々な彫刻作品の鋳造を手がけた。



黎明像  
1990年 沖村正康作  
沖村さんは高田博厚の愛弟子、この像は市立図書館南側に展示されています。



沖村 厚さん・康治さん

一見黒っぽく見える彫刻も、それぞれ色味が違います。色あいにこだわってメンテナンスしていますので、そういうところも楽しんでほしいと思います。  
また、普通の美術館では許されない「作品に直接触れてみる」ことが可能な高田博厚彫刻群。気軽に足を運べる東松山市の方がうらやましいくらいです。

参考文献  
高田博厚作品集（福井市美術館）